

市民がつくるごみ読本

シー・アンド・ジー

C&G

●年1回発行

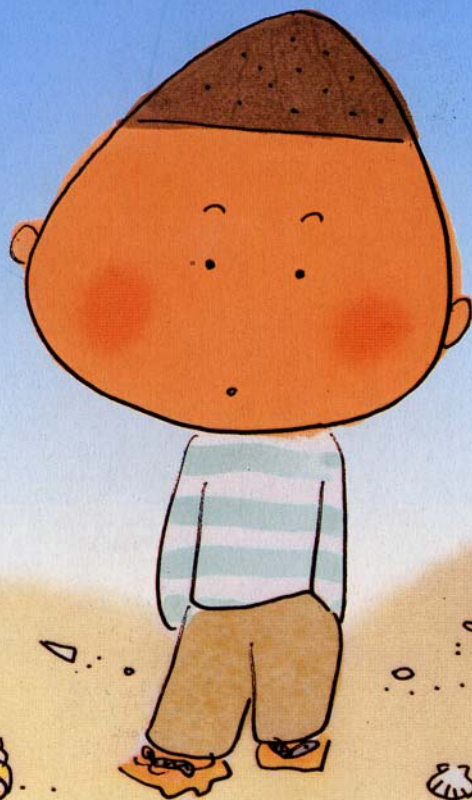
No.9

特集

ごみと海

めぐる—

ごみ・生命・環境



「豊島」は終わっていない

中坊公平

「水俣病からの教訓」

原田正純

「人の心に木を植える」

畠山重篤

（印）

廃棄物学会編集

森里海連環学の創生

——時計台対話集會に参加して

編集部 ● 水口 保
みなくち たろう

心に森を築く試み

2004(平成15)年7月17日と24日の2回に分けて開催された、京都大学フィールド科学教育研究センター(以下、京大フィールド研)時計台対話集會に参加した。第1回目のゲストは作家で、C・W・ニコル・アファンの森財団理事長でもあるニコル氏。ユーモアあふれる彼の話も興味深かったが、他メディアでも多く報道されているので、今回は第2回の5人による講演についてご紹介したい。いずれにしても、1回、2回とも、各講演の内容、全体としての構

成、対話集會という位置づけなど、非常に充実した集會であったと思う。以下、『C&G』の特集(こみと海)とも共通する部分が多いので、講演会の模様を私なりにまとめてみた。

参考のために、2日間のプログラムを書いておくが、一見して非常に周到に計画された講演会であることをご理解いただけるだろう。

【第1回(7月17日)】

C・W・ニコル「森を築いて海を思う」

【第2回(7月24日)】

畠山重篤「海の恵みに森を想う」
田中 克「渚から森と海を思う」
寺島紘士「海の再生に森里海のつながりを感じる」

梅本信也「森と海をつなぐ里の文化」
安田喜憲「森と海を結ぶ文明論」

対話集會と森・里・海のつながり

対話集會の冒頭、あいさつに立った田中克センター長は、京大フィールド研設立の経緯の説明とともに、新しいタイプの学問として「森里海連環学」を提唱した。

20世紀後半に科学技術は長足の進歩を遂げ、われわれの生活を豊かに、便利にしてきたといわれるが、一方で深刻な地球環境問題を引き起こしている。この背景には細分化・専門分化しすぎた科学のあり方があり、

学際的かつ統合的な学問領域が今、求められている。

日本は四方を海に囲まれ、世界でも稀なほど豊かな自然に恵まれていた。しかし、森はスギやヒノキの人工林と化し、安価な外材の影響で衰退した林業の犠牲となって荒廃し、川は防災や管理の名目で直線化してコンクリート張りとなり、そして海は巨大なごみ箱となって悲鳴を上げている。

本来の森と海のつながりは、地球全体で言えば循環系あるいは免疫系ともされる重要なつながりであり、それを再生させることが急務である。そのためには技術革新ではなく、

私たち自身の価値観の再生と、新しい理念に根ざした統合学問領域である「森・里・海連環学」の創生が不可欠であり、「森は海の恋人」運動などの社会運動とも連携していきたいと述べ、大きな拍手を浴びた。

畠山重篤氏

「ことば」が人を動かす

2日目の最初に演壇に上がった畠山氏の講演については、本誌(74ページ)の原稿と重なる部分もあるのですが、そちらに譲るが、いくつか忘れてはならない発言があったので書き留めておきたい。

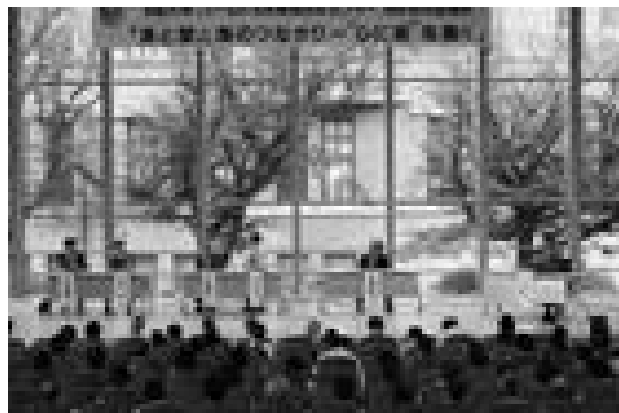
一つは、運動をするには理論・理屈だけではなく、人の心を動かす「ことば」が必要だということだ。彼の運動が「植樹運動」であったならば、おそらく多くの人の共感を得られることはなく、



「森は海の恋人」というこ



▲対話集會冒頭であいさつする田中センター長



とばを与えてくれた歌人・熊谷龍子氏の功績は大きい。もちろん科学により解明される自然のメカニズムについての知識は必要だ。しかし、それだけでは人を動かし、運動を成功に導くことはできないだろう。

もう一つは、2003年度日本工

境破壊によるところが大きいだろう。そしてその再生には、森の時間と同じく、50年、100年という時間的スケールでものを考える必要がある。最後に「親にらむ比目を踏ん汐干哉」という江戸時代の俳句を引用して、100万都市江戸を抱えた湾内には干潟があり、潮干狩りを楽しむ人間がいる一方、ヒラメもたくさんいたという日本の原風景の大切さを見直すべき時期であるとして話を締めくくった。

寺島紘士氏

山・川・海の総合的管理

財団法人シブ・アンド・オシヤン財団海洋政策研究所長である寺島紘士氏は、埋立による干潟の減少、生活や工場排水などの影響による汚染と富栄養化、有機物質排出による公害病の発生など、沿岸部の環境変化について述べ、その管理に問題があることを指摘する。

日本列島の海岸線は約36800kmで、アメリカの19900km、中国の3

ッセイストクラブ賞を受賞した『日本汽水紀行』（文芸春秋社刊）の取材で日本全国の汽水域を巡ったときの体験。山の森から流れ出した水が川を流れて海に流れ出る部分を汽水域というが、日本に2万数千本の川があることを思えば、海の畔に立つとどこに行っても淡水と海水が匂い立つ——日本はそういう国なんだと改めて実感する。そこには海の幸と米に恵まれた文化が育まれており、川の上流には森林が息づいている。その関係の多くが崩れていることが問題であり、日本列島の弧に垂直に走る川の線で物事を考えることが必要ではないか。そこから発想することで日本が持っている世界に誇るべき価値観を見いだせるのではないか。漁師さんが語る環境文明論は説得力があった。

田中 克氏

危機に瀕する渚

京大フィールド研センター長でもある田中克氏は、有明海の特産稚魚



の長期にわたる研究の結果、海と陸の狭間である渚域が危機に瀕していることを訴

えた。岩礁にはコンブ・ホンダワラなどさまざまな海藻が繁茂して海の森を形成するのだが、20年ほど前から磯焼（注）という海の砂漠化が顕著となり、海藻が生えない状況になっている。また、日本周辺の川にダムができて砂が流入しなくなつたため、砂浜が減っており、ここを生育場とするマダイやスズキ・ヒラメなどの稚魚に影響が出てきている。有明海の場合、筑後川などから流出する砂が減少したことによって干潟が消滅しようとしており、一方襟裳岬では砂漠と化した海岸域を半世紀をかけて緑化し、海の森を再生して漁獲量を画期的に増大させたという。

これらの因果関係については論争が続いているということだが、やはり森と川と海とつながる生態系の環



2000kmに比べ、国土の狭さを考えると非常に長い。国土の6割を超える森林帯が涵養する水が2万本以上の川となつて海へ流れ込むというのが日本の特色であるが、行政制度的には海岸と河川はバラバラに管理されている。さらに海の汚染はその8割が陸上における人間の活動に起因するとされるところから、広域な環境を視野に入れた総合的な管理が必要である。また、生態系の総合的な環境保全に対する取り組みも必要で、国・都道府県・自治体という垂直的なものと、地域の関係者が集まった市民参加の水平的な取り組みの双方が必要で、そのために環境教育の重要性を強調した。

いずれにしても、沿岸域の問題は、私たち一人ひとりに関係する重要な問題であるため、一般市民も当事者として取り組むべきことで、その代表的な例

として、畠山氏の「海は森の恋人」運動などの事例を紹介して、森と川と海を結ぶ様々な運動が連携して、パートナーシップという形でよい環境を次代に伝えていく必要があると述べた。

梅本信也氏

里の文化の再評価

京大フィールド研助手（現助教）であり、照葉樹林文化圏と黒潮文化圏における自然と人間の共生を研究テーマとする梅本信也氏は、江戸時代の鎖国期に高度に発達した里の文化のすばらしさを強調する。

人間の生活や文化の影響を受けやすい部分と影響を少しでも受けている部分という概念で地球を二つに分け、前者を「自然域」、後者を「里域」と呼ぶことを氏は提唱する。里域のなかで、人の住んでいる部分を「里」、その前の海は「里海」、背後の山は「里山」、そしてそれらを被うのは「里空」、さらには「里宙」（さとぞう）と呼ぶ。「里宙」というのは、詩的な

イメージがふくらんできて、とてもよい。

いずれにしても、「里」ということばからは、破壊につながるマイナスイメージはない。たとえば、田んぼの畦一つとってみても、代掻きや畦踏みなどの作業を通して草が繁殖することを防止する。ていねいに管理することによって毎年同じような田んぼが現れ、畦には可憐な花が咲く、これを美しいと感じる美学も代々伝えられていく。

日本が鎖国政策をとっていた江戸期は、300年にわたって地域内での循環が完成されていたという意味でも特筆すべきで、特に食品に顕著に現れている。たとえばなれ鮓だと里海でとれる海の幸である鯖と里地の米を海岸に生えているパンチクの葉で包み、里山のもで作ったユッケで漬けこむと、里空（空気中）の発酵菌の助



山のもで作ったユッケで漬けこむと、里空（空気中）の発酵菌の助

けを借りて素晴らしい食品ができる。都市と田園をつなぐ有機物の往復など、日本全体というスケールで考えても物質循環は合理的に行われており、しかも文化にまで昇華している。このような先人の知恵を大いに見直すべき時期に来ているようだ。

安田喜憲氏

美と慈悲の文明論

最後に演壇に立った、国際日本文化研究センター教授・安田喜憲氏は、環境考古学の立場から森と海を結ぶ文明論をユーモアたっぷりに展開した。

近代ヨーロッパ文明の根底にある“自然は克服すべきもの”とする概念、そして、パン（畑作）と肉（牧畜）の食文化が森を破壊してきた一方、日本人が伝統的に持っていた米（稲作）と魚（漁業）の文化は森・里・海の命の循環と見事に調和する。

地球も人間の体もその7割が水であり、私たちの心も水の中にあると氏は語る。人間は五感を通して、あるいは空気・水・食べ物を通して自

然と接しているところから、何千年という長い期間をかけて、現代の我々の心は築き上げられてきた。

稲作農業を行うときには、自分の田んぼだけに水を引いてはいけなし、水を汚しては共同体の中で生きていけない。美しい水を使おうと思ったら、他人のことを考えないといけない。海や森、生きとし生けるものに對する思いやりを持たなければ、水の循環社会を維持することはできない。米と魚を食べる日本人の伝統的な食生活は森を守り、水の循環系を守り、豊饒の海を守り、他者への思いやりを情操する。これを「美と慈悲の文明」と氏はよび、これこそが21世紀を新しい時代に変えていくパワーとなると言う。たとえば、有明海にはヤマノカミというカジカの仲間の魚がいるが、なぜこの名がついたのか。実はヤマノカミは若いときは川の



仲間の魚がいるが、なぜこの名がついたのか。実はヤマノカミは若いときは川の

上流で過ごし、成長すると川を下ってきて有明海で産卵する。そしてまた大きくなるために川を遡上する。日本人は山・川・平野・海という生命と水の循環系が結ばれていることを知っていて、この名を付けたのだった。高度成長期以降失われてしまったこの心を、われわれは取り戻さなければならぬ。

安田氏の講演の後、「対話集会」の名に恥じない活発な質疑応答があり、市民の関心の高さと期待の大きさを感した。

日本から世界へ発信する オリジナルな学問

盛会裡に終わった対話集会の後、私は京都大学農学部にある京大フィールド研に田中センター長を訪ねて、改めて「森里海連環学」の理念と今後の展開について話を伺った。

「いくら科学技術が進んでも、それだけではクリアできない局面に至っており、人間がこれからどう生きていくのかという価値観そのものにつ

いても研究者自身が考えながら、世の中の価値観を変えていくような学問を創造していかないと本当の解決には迫れない。対話集会の副題「心」に森を築く、は、そういう意味をこめたネーミングです。

森里海連環学は、里の知恵を重視して、森と海の自然科学的な、そして文明論的なつながりを説明する新しい学問であり、森と水と豊かな海に恵まれた日本から世界に発信できるオリジナルな学問なのです。

現在考えているのは、森林資源の活用と文化遺産という二つの意味をこめて、循環型社会・環境調和型社会の象徴となるような建物を木造で造りたいということです。そこは学問を進めるための連携の場ともなり、市民と大学がふれあえる場にもなれば、すばらしいとは思いませんか」

取材を終えて京都大学の構内を歩いているとき、大人だけでなく子どもたちの間でも傷つけあう世相を憂えた田中センター長のことを思い出していった。

京都大学フィールド科学教育研究センター

〒606-8502 京都市左京区北白川追分町
TEL. 075-753-6402
<http://fserc.kais.kyoto-u.ac.jp/>

教育研究部と管理技術部からなる。

本部は京都大学農学部内に置かれ、森林（芦生・北海道・和歌山の各研究林）・里域（上賀茂・徳山・北白川の各試験地と紀伊大島実験所）・海域（舞鶴・瀬戸臨海の各実験所）の各ステーションを構成する9つの施設がある。

——地球が砂漠化し、私たちの心も砂漠化しつつあるようななかで、われわれ一人ひとりが、人間として何をすればよいのか、大学は、研究者は、そうした困難な問題の解決にどんな貢献ができるのか。

その問いかけに対する一つの方向性として生まれた「森里海連環学」の今後に期待したい。

注：海水の塩分が減り海藻が減少して、石灰質の生物が磯にはびこる現象。

（写真提供：京都大学フィールド科学教育研究センター）